

富  
貴  
榮  
華

島太郎

世に伝わる物語の中で真実が包み隠さず語られているものはほんの一握り、あるかないかです。大抵の物語は伝搬していく中で改編され、歪曲され、もしくは一部のみの抜粋がそのまま広まっていき、まったく原型を留めなくなるのです。この話もまた然り。君たちが知っているのは、やはり、多くの誰かによって編集されたものなのです。今日は、特別にその『原型』をお話しましょう…。

太郎は目を覚ますと水瓶に溜めてある水で顔を一撫でした。頭がぼんやりとしていて視界も何となくはつきりとしめない。日は既に天高く昇っていて、よく寝たはずなのに体も怠い。夢を見た。だがどのような夢だったかは思い出せない。家の中には自分一人で、父と母の姿は見えない。仕事に出かけたのだ。太郎は成人もそこそこに定職にも就かず毎日を過ごしている。外に出るとよく晴れた空と波の音がまどろんでいる太郎を内から刺激する。いつもどおり村外れのほこらに出向いてお祈りをする。物心ついた時にはこの習慣がついていたので、おそらく両親にそ

うするよう躡けられたのだろう。釣竿を片手に砂浜に出る。そう言えば、最近この周辺の集落で神隠しが頻繁に起きているらしい。行方知らずになった人間はもう三十人を超えていた。頭がまたぼんやりとする。

少し歩いたところに子供たちの声がする。何か騒ぎ立てている。皆一様に下を向き砂浜に置いてある黒い岩のようなものを樹の枝でつついていた。近くまで歩み寄ってみると子供たちが弄っていたのは岩ではなく亀だった。頭の芯が急に重くなる。夢で見た光景だ。薄暗いもやが掛かっている。つきりとはしないが、同じ情景を夢で見たのを太郎は思い出した。

子供たちに亀をいじめるのをやめるように諭すと、子供たちは興冷めといった面持ちで村の方へ帰っていった。太郎は何故か「この亀は人の言葉を喋るのではないか？」という思いに駆られた。確信があったわけではないがそう思った。太郎は亀を見下ろしじっと見つめる。太郎の服は潮風にはためくが、聞こえるのはその音だけでとりわけ変わったことはなかった。気を削がれた太郎は物好きが欲しがるかもしれない、とその亀を腰に付けた魚籠の中に入れ持ち帰ることにした。

砂浜から村の中心部に向かう。太郎の暮らす村はお上から寵愛を受けた人間が開墾したと言われ、都からは遠く離れていたがそれなりに栄えていた。何度か水害にあったりもしたがそのたび村人は力を合わせて村を立て直してきた。太郎は三歳年上の遠い親戚、熊人に会う。

「よう太郎、今日も真昼間からふらついていられるなんて良いご身分だな」熊人の家は代々大工を家業としている。

「なあ熊人、亀欲しくはないか、亀」太郎は魚籠の中からさつき捕まえたばかりの亀を出す。はじめは眉をひそめた熊人だったが、ここ数日、祖母の体調が良くないことを思い出し「亀は長寿の象徴

だし縁起物だから貰っておこう」と亀を受け取った。貰うだけでは悪い、と熊八は太郎に綺麗な石をくれた。新しく家を立てる際に行った基礎工程の途中、土の中から小さな布袋が見つかり、その中にこの石が入っていたという。透き通った深く碧い色が美しい。人差指と親指で作る輪と同じくらしいの大きさだ。これは珍しい、と太郎はその石を受け取りその場を後にした。

そのまま通りを歩いて村の人の顔を見て回る。太郎は生来の人柄の良さで皆に好かれていた。すれ違う村人は太郎の顔を見ると明るく声を掛けてくれる。

起きてから何も口にしていない太郎は団子屋に寄ることにした。この団子屋の娘はおみつといい、おみっちゃんと呼ばれ村でも評判の美人で性格も屈託なく明るい。

「おみっちゃん、今日も可愛いねえ」もう嫌というくらい言われているだろうこういった言葉にも、おみつは澄んだ笑顔を返す。太郎は団子を二つ頼み、頬張りながらお茶をすすする。

「ねえねえおみっちゃん、もうすぐ誕生日だよね。なんか欲しいものある？」おみつは太郎が腰を下ろしている横に座ると無言で太郎の顔を見つめる。首に薄っすらと浮かぶ白い筋が儂い美しさを醸す。

「な、なに？」

「ねえ、太郎さん……」その吸い込まれそうな瞳に、太郎の胸は次の鼓動が待てぬと言わんばかりにその鐘を連打する。

「どうしたの……」

「前から言おう言おうと思ってたんだけど……」

「うん……」

「いい加減仕事したら？」にこりと笑いながら、一個もらうね、と串に刺さった最後の団子を頬張る。もぐもぐと小さい唇が可愛らしく動くのを見ながら太郎は優しい気持ちになる。

「これあげるよ、綺麗だろ」太郎は亀と交換で熊八から貰った碧い石を差し出した。

「まあ、綺麗！こんなに綺麗な石、見たことないわ。どうしたのこれ？」手のひらに石を乗せながらおみつは訝る。

「亀がその石に変わったんだよ」太郎は人差し指で首元を搔く。太郎には嘘をつく鼻をひくつかせる癖があり、おみつもその癖を知っていたが今回は太郎の鼻がひくついていない。おみつは変だなと思いつつも「どうせなら仕事が変わってくれば良かったのにねえ」と立ち上がった。

また来るよと腰を上げる太郎に「お勘定がまだですよ、お客さん」と、おみつは芝居がかった台詞回しと目付きで両手をお椀型にして差し出して来る。

「はいはい、これだけしっかりしてればこの店も安泰だね」太郎は小銭をおみつに手渡す。

「ちよつと待っててね」と店の奥に入ったおみつは手に包みを持って戻ってきた。

「これ、石のお礼。私が新しく考えたお団子なの。あとで感想聞かせてね」そう言ってまた店に戻っていくおみつの背中を見送ると、太郎はいよいよ暇になった。

天気も良いし山にでも登ってみようかと太郎はその足を山道に向けた。左手に広がる海を見ながら道は少しずつ細くなり草の背丈が高くなる。夏にはその威を大いに振るった陽もいくらか和らいできている。木々の間から細く真っ直ぐと差し込む光の筋は、透明なつららが地中から太陽に向けて天を突き刺すために真っ直ぐ伸びているようにも見える。太郎はその光の筋の中に一頭の犬がこちらを向いているのを見た。近付いていく太郎をまるで怖がらない。また頭がぐらつと揺さぶられる

ような感覚を覚える。太郎は何故か「この犬は人の言葉を喋るのではないか？」という思いに駆られた。確信があったわけではないがそう思った。太郎は犬を見下ろしじっと見つめる。

「その団子くれたら家来になつてあげますよ」確かに犬はそう言った。

「うわっ」と太郎は思わず声を上げ尻もちをついてしまう。もう一度犬を見る。

「そんなに驚かないでください。僕は犬の姿をしてるけど魂は人間なんです」と言っている。にわか信じられないことではあったが、目の前には確かに人の言葉を喋る犬がいる。

「この姿になつてから何も食べてないからお腹が減つて死にそうなんです、お願いです、その団子をください」犬は何故このようなことになつたのかという記憶が無いという。太郎は何がなんだか分からないまま、おみつに貰つた団子を一つ分け与えた。

もののけの類かとも思ったがそのような邪心の影はどこにも見当たらない。犬の話によると、気が付くと犬の姿で山中にいたのだという。水以外は何を口にしても不味くて食べられず空腹に苦しんでいた。そこに現れたのが太郎だったのだ。

「俺、太郎。お前は？」

「名前も思い出せないんです…」

「じゃあ次郎にしようか」

「安直ですね」こうして犬の次郎は太郎の家来になつた。

次郎を連れて歩く太郎は一端の大將気分で口笛を吹きながらさらに山道を昇つた。しばらく歩くと眼前に海の青が広がる扇状に切り開かれた丘に出る。太郎と次郎はその斜面に腰を下ろして正面の海を眺める。村が左手に小さく見える。だんだんと傾きはじめて陽が海面をまだらに白く染め上げ

ている様子は太郎の心を落ち着かせてくれる。いつかおみっちゃんと一緒にこの景色を見てみたいな、ぼうっとそんなことを思っていた。次郎は海から山肌を撫でて上がってきた涼やかな風に目を細めている。

「俺さあ、好きな子がいるんだけど…次郎にも好きな子がいたのかな？」

「さあどうですかね…でも人を好きになる気持ちは分かりますよ」

「おみっちゃんというんだけどさ、目がくりつとして可愛いんだ」太郎はすぐ横に生えている雑草をむしる。

「おみっちゃんに次郎を見せたら驚くかなあ…どう思う？」

「驚くと思いますよ。太郎さんだって尻もち着いてたじゃないですか」次郎が楽しそうに笑う。

「もし俺とおみっちゃんが一緒になったらお前も一緒に住もうな」次郎は無意識に尻尾を振っている。

「お前、心は人間でも体はやっぱり犬なんだな」

「見たら分かるでしょう」二人の笑い声が風に溶けていく。

その風が吹き抜けていく方から、がさがさと騒がしい音がする。

「なんだろう、あれは」

「猿と蟹が喧嘩してるみたいですね」次郎はかなり目が良いようだ。次郎によると木の上に登った猿が木の下にいる蟹に向かって木の実を投げているらしい。

「あのままだと蟹の方は死んじゃうかもしれない」次郎のその言葉を聞いて、太郎はやれやれと腰を上げて猿と蟹の方に向かう。

「おい！えて公！弱い者いじめはやめんか！」その言葉に猿は驚いて木から落ちかける。そのまま

木から降りてくる猿を見て、またしても太郎は頭に重りを乗せられたような感覚に襲われる。太郎は何故か「この猿は人の言葉を喋るのではないか？」という思いに駆られた。確信があったわけではないがそう思った。太郎は猿を見下ろしじつと見つめる。

「その団子をくれたら蟹をいじめるのやめるよ」確かに猿はそう言った。太郎は思わず横にいる次郎を見た。

「僕以外にも喋れるやつがいたんですね」と人間の言葉を話す次郎に「お前もか！」と猿が驚いて飛び上がる。

「驚いたか！」太郎はまるで自分が奇術でも使ったかのように胸を張る。太郎に促され猿は蟹に詫び、蟹はそのまま姿を消した。太郎は仕方なくおみつに貰った団子を一つ分け与えた。犬の次郎と同様、この猿も気が付くと山の中にいて人の言葉を喋れたという。これから行くところもない猿は太郎に付いていこうと決めた。

「どうせお前も自分の名前を忘れてるんだろ？なんて名前がいいかな、次郎」

「流れから言って三郎じゃないですか」

「それだな」こうして猿の三郎も太郎の家来になった。

太郎一行は山を降り始める。空が暗くなりはじめ、山の中はさらに暗くなる。太陽から降り注いでいた光が勢力を弱めると、それを待っていたかのように木々の葉が擦れ合い風の音とともに不穏な雰囲気漂わせる。その様子は天敵が消え、繁殖に歯止めが利かなくなった害虫を思わせる。

「何だか怖いなあ」三郎は威勢が良い割りには臆病なようだ。

「待って太郎さん、人の臭いがしますよ」次郎はその鼻をひくひくと動かして茂みに割って入る。



茂みの奥はさらに暗いが、動物の目を持つ次郎と三郎は太郎よりも視界が明瞭なのかもしれない。彼らの視線の先には確かに動く影が見える。太郎たちが近付くとその影は甲高い声を上げた。見るとそこには小僧が一人、栗拾いをしていた。

「こんな暗くなるまで山の中にいると親が心配するぞ」

「おらはお寺に住んでるんだ。和尚さんの使いで栗拾いに来てるんだ」太郎の呼びかけに小僧はそう返しながらも一人が余程心細かったのか、べそをかきながら「やまんばに食われたらどうしようかと思った」と漏らした。それを聞いて高笑いをする太郎。

「小僧、やまんばってのはな、大人たちが作った嘘だ。お前みたいに遅くまで山で遊ぶ子供がいると心配だからと大人たちが作り話を子供たちに聞かせたのが始まりなんだよ。俺も小さい頃は信じてたけどな」お腹空いているだろうと太郎は小僧に最後の団子を食わせてやる。

「さあ一緒に帰ろう」次郎と三郎は敢えて喋ることもないだろうと黙っている。

「この犬と猿はお兄ちゃんが飼ってるの？」太郎は二人を見る。

「まあ、なんて言うか、友だちなんだ」小僧はふうんと不思議そうに次郎と三郎を見た。帰る道中、小僧は和尚から貰ったという御札を三枚出し「やまんばがいらないなら、これ要らないや。お兄ちゃんにあげる」と太郎に三枚の御札を手渡した。それぞれ『炎』『雪』『偽』と書いてある。どうやらお守りの一種らしい。

「ありがとうな」太郎は小僧を寺まで送り帰路に就く…。

さて、ここまでの流れで分かる通り、この物語の中には現在それぞれが独立して語られているものが多く含まれています。何度も言いますが、それら一つ一つはこの物語を元にして作られたものなのです。この物語はここから少し趣が変わってきます。では続きをどうぞ…。

村に帰るとまた熊八に会った。

「何だ、とうとう犬と猿しか友だちがいなくなったのか？ところでよ、あの亀が消えちまったんだよ。ちよつと目を離れた際に逃げちまいがった」

「亀に逃げられるなんてのろまにもほどがあるよ」次郎と三郎は下を向いて笑いを堪らえる。熊八は「珍しいからせつかくお婆に見せてやろうと思ったのに」と落ち込む。近いうちにお婆に会いに行くからよろしく言ってくれ、と太郎たちはその場を後にした。

家に帰り、次郎と三郎を外に待たせ土間の戸を開けるとそこには見知らぬ女が立っていた。美しい女だ。

「ちよつどいい所に帰ってきた。太郎や、この娘さんは、かぐやさんと言うそうじゃ。美しかろう」太郎の母はまるで自分の娘を自慢するかのよう目細めている。

「わしが裏山で竹を採っていたら道に迷われたと言つてな。家は遠い地にあるらしいし、おなごを一人で置いてくわけにもいかずうちに連れてきたんじゃ」太郎の父も同様で、会って間もないこの娘をえらく大切に扱っている。また太郎の頭に黒いもやがかかる。

「こんばんは、初めましてかぐやと申します。少しの間お世話になります」かぐやはそう言つて太郎に頭を下げた。黒く艶のある髪が囲炉裏の火を妖しく映している。

「どうも、息子の太郎です」太郎はこんなにも美しい女を見たのは初めてだったので、かぐやの目をまともに見ることもすらできないでいた。

太郎は棚にあつた餅を焼くと少し冷ましてから外の次郎と三郎に食べさせた。

「家の中には入れてやれん、これで我慢してくれ。二人とも風の当たらないところで休んでくれ」  
「ありがとう」次郎と三郎は太郎に礼を言つて餅を美味しそうに食べた。

家の中に戻ると両親とかぐやは囲炉裏を囲んで楽しそうに笑つていた。

「太郎もこつちにおいで」太郎の母が夕飯を用意し終えると、かぐやは「私は大丈夫です」と夕飯を遠慮した。

「気を使わんでええんよ、たんとお食べ」太郎の母がそう言つても、かぐやはついにご飯に手を付けなかった。

「そう言えばかぐやさんはどうしてあんなところにおつたんじゃ？」太郎の父はお茶をすすりながら聞く。

「実は探し物をしておりまして。碧く透き通つた石なのですが……」それを聞いて太郎はおみつにあげた石のことを思い出した。

「その石って何なんですか？」太郎は興味本位でかぐやに尋ねる。大切な物ならおみつに話して返してもらっても良いと思つたのだ。

「私の家に古くから伝わるものなのですが、盗まれてしまつて……」

「それは気の毒にねえ」と太郎の母がかぐやの隣に座つた時、太郎は黒々とした違和感を覚えた。かぐやに影が無いのだ。隣にいる母の後ろには囲炉裏の火から受けた光でしつかりと影が出来ている。だが、かぐやの後ろには影が無い。太郎は幼い頃に熊八のお婆から聞いたことを思い出した。

「異形の者には影が無いんじや。たぬきやきつねも化けたときは一緒じやよ。どんなに上手く化けても影を作ることは出来ないんじや」

このかぐやと名乗る女は何者なのか。少なくとも人間ではない。次郎や三郎のように中身は人間で見た目が獣の者とは真逆、つまり見た目は人間だが中身は何か別の者だということだ。「見つかるといいですね」太郎は石のことを黙つておこうと決めた。太郎の母はかぐやを奥の部屋に通し「ゆっくり休むんだよ」と戸を閉めた。

「おつとう、おつかあ、聞いてくれ」太郎は声を潜めて二人を見る。

「まあまあお茶でも飲みなさい」のんびりとしている自分の母親に太郎は苛立ちを覚える。かぐやのいる部屋を背にする形で太郎が座り、その左側に太郎の母が、右側に父が囲炉裏を囲んで腰を下ろす。母がお茶を淹れる間、父は囲炉裏の炭で床の板に何かを書いている。太郎がそれを覗きこむと「X」と書かれていた。太郎が父の顔を見ると父は突き刺すような鋭い視線をかぐやのいる部屋に送る。にこにことしている母も表情には出さないが頷いている。声に出さないということは「聞かれてるぞ」ということなのだろう。何より両親がかぐやの異常さに気付いていたことに太郎は驚

いた。

「さあ、私たちも寝ましよう」太郎の母はにこやかな表情を崩さずに布団を敷き始めた。囲炉裏の火を消し布団に入っても、三人は眠らなかつた。三人が放つ意識の層が暗闇に薄い結界を張るようだ。それを感じているのか、かぐやも部屋から出てこないまま朝を迎えた。

翌朝、かぐやは部屋から消えていた。

「あいつの目的は何だったんだろう」太郎の疑問に父が答える。

「あいつは人喰いの類だな」

「可怪しいと思つたんですよ、山から来たというのに体には海の匂いが染み付いていましたしねえ」気が付くと母が隣に立っていた。

「ここのとこり起きている神隠しもあいつの仕業かもしれん」

「碧い石を探してるって言つてましたねえ」それを聞いて太郎はおみつの身を案じた。

「次郎、三郎、出かけるぞ」太郎の声で家の裏から犬と猿が飛び出してくるのを見て、母は「気を付けてねえ」と見送つた後「やっぱり血筋なんですかねえ」と父を見る。

「これはお前にも内緒にしておいたんだがな、あいつがまだ物心つく前、目を離した隙に熊人と山で迷子になつたことがあつたらう」

「ええ、覚えていますがとも。本当に心配しましたもの」

「山の中を搜索していた仲間が言うにはな、太郎が泣いていたすぐ近くでやまんばが体をばらばらに引き裂かれて死んでいたらしい。あいつ自身も覚えていないようだが、あとで熊人に聞いたら、熊八がやまんばに襲われたところを太郎がやつたらしい。あいつは覚醒すると手が付けられん」

「そうだったんですか：そんなことが：。太郎が生まれたときに雷が鳴って虹が出ていたでしょう？わたしはあれを見て、この子の人生は人の何倍も辛いものになるんじゃないかって不安を覚えたんですが運命には逆らえないんですかねえ」

「大丈夫だ。俺達の息子だ」父は力強く言い切った。

団子屋に着くと太郎は店の中に駆け込んだ。

「おみっちゃん！おみっちゃんは無事かい」太郎の大声に、店の準備中だったおみつの父親は何ごとかと慌てた。

「おみつなら浜に散歩に行ったぞ。太郎、お前いい加減仕事しろよ」おみつの父親が喋り終える前に太郎は店を飛び出していった。浜に向かう途中、太郎は熊八のお婆が言っていたことを思い出していた。

「この村はな、伝説の村なんじゃ。わたらの先祖様が海の底から現れた化物を追い返し、そんなことが再び起きんようにと神社やほこらを作ってお祈りするようになったんじゃ。水害で神社は流されてしもうたし、祀られてたものも一緒に無くなってしもうた。最近はお祈りする者も減ってきたがな、そういう気持ちを忘れたらいけんよ」その話を聞いて熊八と二人で勇者と怪物を代わり番こに演じて遊んでいた記憶が蘇ってきた。太郎はいつも熊八に負かされていたので、やられた直後に「俺は本体じゃない！お前の後ろにあるその岩こそが本体だ！俺が本当の怪物だったら背中からやられてるぜ」と強がっていた。

「いつそつちに移動したんだよ」熊八はそれを鼻で笑った。

「えっと：あれ：小指を立てた時だ」と太郎が苦し紛れに言う。「それは女が出来た時に使う合図

だ」と熊八は無視した。

「あつ！おみつちゃんだ！」太郎の言葉に熊八が振り返ると「隙あり！」と太郎は熊八に飛び掛つたが、熊八に身をかわされ腕を取られた。

何故こんなことを思い出すのだろう。もうすぐで浜が見える。熊八とよく遊んだ浜だ。

「太郎さん、あれ！」次郎が走りだした砂浜の先におみつが倒れていた。

「おみつちゃん！」おみつは気を失っていたが息はある。おみつを抱き上げる太郎に三郎が声をあげる。

「おい、太郎！なんだあいつ！」三郎が指差す先にはかぐやが立っている。

「くつくつく：ついに手に入れたぞ：この石さえあれば我は完全に復活できる……太郎、お前には蘇った我の最初の生贄になつてもらおうぞ：」目の前で美しい女がみるみるその姿形を変えていくというのに太郎は他のことを考えていた。

「そうか、思い出したぞ：夢で出てきた化物はお前か。亀の姿に化け人間を海の底に連れ出し、もてなす振りをして襲う。そうだろう！」

「何故それを知っている：我はこの石無しではまともに戦えん体だからな：だがそんな面倒なことはもう必要ない、この石さえ手に入ればな：」かぐやの体は倍以上に膨れ上がり、皮膚にはどす黒い鱗が隆起している。手足の指は鍵爪のように変形し、太い尻尾が生え、大きく裂けた口から無数の牙が見える。

「石を取り返すついでに家族ごとお前たちを食つてやろうと思つたんだがな、お前の親は何者だ？隙が無さ過ぎた……：そうかお前たちはあの男の子孫だな？何となく面影があるぞ：丁度良い、三

百年前の恨みを晴らしてくれる：」わけが分からないかぐやの言葉をよそに、太郎はおみつが気になつて仕方がない。

「おみっちゃんか石を持っていると何故分かつたんだ」

「簡単な話だ：美しい女の姿で村人に聞けば、お前がその女に熱をあげていたことくらいすぐに教えてくれたぞ：とてころでそこにいる犬と猿にはただの獣ではないな：そうか我が喰つた人間の魂が宿っているようだな：過去の記憶があるまい：一部でも体を取り込めば、記憶は我のものになる

：お前たちの記憶は我の中だ：惨めだのう：」次郎と三郎は謎に包まれていた自分たちの過去がこのような形で解明されるとは思つてもみず、互いに目を見合わせる。

「お前に喰われた：？」

「じゃあ一生このままかよ」次郎も三郎も受け入れがたい事実をいきなり突き付けられ混乱している。かぐやの額に埋め込まれている碧い石が怪しく光るとまだ陽は東の空にあるにも関わらず、太陽を黒い風呂敷で包んだかのように辺りが暗くなった…。

さあ、どうですか。君たちが聞いて育つた話の様式であれば、このあと太郎たちは力を合わせてかぐやを成敗し、村に平和をもたらし、めでたしめでたしといったところでしょうか。子供が寝る前に聞かせる話としてはその方が都合が良いかも知れませぬね。



ではもう少し続きを話しましょう…。

太郎は胸元に手をやり御札を取り出した。栗拾いをしていた小僧から譲り受けたものだ。どうか俺たちを守ってくれ、太郎がそう祈りを込めると『炎』と書かれた御札がひらりと胸元から飛び出て、かぐやの足元に静かに着地した。その瞬間、かぐやの全身が炎に包まれる。その炎の勢いはとても人が熾せるようなものではなく、轟々と音を立てかぐやを飲み込む。火柱の中からかぐやのうめき声が聞こえ、その隙に三郎はおみつを離れた木の陰に移したが、その時、三郎はおみつの体が異様に軽いことに気付いた。とっさにおみつの体を確認するが異常は見当たらない。異常があったのは三郎の体だった。いつのまにか体毛は太く伸び、体が二回り以上大きくなり太郎の身長をゆうに超す大猿となっていた。これはどうしたことかと次郎に目をやると、次郎はさっきまでの愛らしい姿が見る影もない獰猛な獅子に変わり果てていた。浜の砂に食い込む次郎の足は太く、密度の高い筋繊維が幾重にも重なっているのがわかる。牙はかぐやのそれよりも大きく鋭い。三郎はおみつを寝かせると太郎たちのもとに跳ぶようにして戻る。

振り返った太郎は眼の前にいる獅子と大猿が次郎と三郎だと分かるのに幾ばくかの時間を要したほどだった。

「どうしたんだ、二人とも」太郎の意識からかぐやが消え失せてしまうほど二人の変化は常軌を逸

していた。

「分かりません。ただ気が付いたら……」次郎の恐ろしい外見と言葉の丁寧さにとつもない落差を感じる。

「共鳴したか……」炎の中から低く押しつぶしたような声がした。かぐやが纏わりつく炎を振り払うかのように体を震わせると炎の勢いは次第に弱まり始めた。

「我がこの石で覚醒したのを切っ掛けにお前たちの眠っていた力も開放されたらしいな……この石には異形の者の力を覚醒させる力があるのだ……この石をお前の先祖に奪われて以来、我がどれだけ憎しみに暮れたか……さあ喰ってやろう……」かぐやの体はところどころ鱗が割れたり溶けてはいるが、肉体そのものへの損傷は浅いらしい。

「太郎さん、『雪』の御札を出してください！」次郎に言われるがまま、太郎は胸元から『雪』と書かれた御札を出す。

「出ですよ！凍てつく吹雪！」次郎がそう叫ぶと、暗くなった空に大きな穴が空き、その穴から猛烈な吹雪がかぐやを目掛けて吹き荒ぶ。

「今です！太郎さん！」太郎は足元に落ちている流木を拾い上げ、のたうち回るかぐやの背中を力いっぱい殴打する。ばりばりと音を立てて鱗が割れていく。三郎も加勢し、小さな岩ほどもある拳をかぐやに何度も叩きこむ。炎で熱せられた鱗は吹雪で急激に冷やされたことで著しく強度が落ちているのだ。割れた鱗がかぐや自身に突き刺さり、黒み掛かった緑色の体液が皮膚から吹き出る。

次郎がその鋭い牙でかぐやの右腕に噛み付き首を荒々しく振ると、かぐやの右腕がぶちりという音とともに体から離れた。かぐやがぐったりと前のめりに倒れ、額から碧い石がぼとりと落ちる。するとかぐやの体はみるみる縮んでいき亀に戻ってしまった。少し気が引けたが、太郎はその亀を流

木で潰した。

かぐやの額からこぼれ落ちた碧い石を三郎が拾い上げる。

「あいつが村の伝説に出てきた化物だったんだな」

「俺たちこの姿から戻れないのか？さすがにつらいな」

「そうですね、これじゃ太郎さんの家に置いてもらえないなあ」三人は息を深く吐き、波打ち際からおみつのもとに歩を進める。

「目が覚めていきなり僕たちがいたらまた気絶しちゃいますよ。それにしても空が暗いまま……」  
「言葉を止めた次郎に、どうした、と太郎が次郎を振り返ると三郎の手にあつた碧い石がふわふわと浮遊している。三人はその状況が把握できず呆氣にとられていた。次の瞬間、石が消えた。いや消えたわけではなかった。ものすごい速さで移動し、次郎の額に食い込んでいる。

「おい、じろ……」太郎が言葉を発し終える前に次郎は三郎の腹部を食いちぎっていた。どすん、という音を立てて三郎が砂浜に横たわる。

「おい！何してんだ次郎！」唸り声をあげて振り向いた次郎の目は輝きを失って黒く沈んでいる。

「くつくつく……馬鹿めが……我はお前の先祖に討たれて以来、魂の移動術を身に付けたのだ……この石に魂を移動させ、まんまと新しい肉体を手に入れてやったぞ……」

太郎は三郎に駆け寄る。

「おい！大丈夫か！三郎！三郎！」三郎の意識は既に朦朧としている。食い破られた横っ腹からは臓物が個々の生物のように顔を出している。太郎が次郎に乗り移ったかぐやと向い合つて立つとその遙か向こうに、昨日次郎と座っていた丘が見える。太郎は胸を締め付けられる思いだった。

「一緒に暮らしたかったのに……なあ三郎もそうだろう？」三郎はもう動かない。

「おい！太郎！何だそいつは！」熊八の声がしたのは三郎が元の猿の姿に戻り、息を引き取った時だった。

「来るな熊八！化物が犬の次郎に乗り移ったんだ！」太郎の怒号にも似た声が空気を切り裂くように響く。熊八は太郎の言葉を聞き入れない。ゆっくりと、ある種の余裕すら漂わせている。

「ほう、面白い……もう一人いたか……まったく忌々しい一族だ……」かぐやは不敵な笑みを浮かべて熊八を牽制する。熊八の右手には短剣、左手には槍が握られていた。

「お婆にあの石のことを話したらえらく慌ててな、他にも何か見つかったかって聞かれたからこの短剣と槍のことを話したんだ。そして気が違ったみたい騒ぎ出してよ、大変だったんだぜ。お婆が言うのは、あの石もこの武器も水害で流された神社に祭ってあったものなんだってよ。要するに伝説の戦いに使われた武器らしいぜ。あの石が入ってた小袋はあの石の妖力を抑えるためのものだったんだ。なのに俺が掘り起こして出しちまったもんだからよ。こっ酷く怒られてたら空が急に暗くなったから急いできたんだぜ、感謝しろよ」

「何でここが分かった」三郎の死のせいかな、太郎の言葉には熱がこもっていない。

「そりゃあ空にぽっかり穴が開いて、そこから吹雪が出てれば分かる」熊八は口を動かしながらも目の前に立つ大きな獅子の動きを警戒している。熊八は太郎に短剣を手渡す。木の影にいたおみつはようやく目を覚ましたが、目の前の事態を飲み込めるわけもなかったただその様子を見ている以外にできることは無かった。

この時、三百年前に自分を討ち落とした人間の子孫とその武具に、かぐやは内心焦っていたが小さ

いながらも勝算もあった。「太郎は、次郎に乗り移った自分を攻撃できないのではないか」という考えだった。そしてその考えは正しかった。

熊八が「さっさと片付けて仕事に戻らなくちゃ怒られちゃう」という軽口を叩いているのに対し、太郎は黙っていた。かぐやは太郎に狙いを定める。熊八の方に体を向け、砂を蹴る。腰を落とし構えた熊八の手前で一気に方向転換し太郎を狙った。予想外の攻撃に太郎の反応は遅れ、一瞬のうちに太郎の左肩から下が消えた。

「太郎！」熊八がそう叫んだ時には太郎は倒れ、左の肩口からは血が噴き出していた。熊八に生じた一瞬の隙を見逃さんとかぐやは熊八にも襲い掛かる。とっさに体を避けた熊八は間一髪でその攻撃をかわす。太郎は起き上がることができずにいた。肺もやられたのかもしれない。太郎が木が生い茂った方を向いて口を動かしているが聞き取れない。それから力を振り絞って向き直り「熊八：気をつける：そいつは：」と残し太郎の体から生気が抜けた。

熊八は怒った。いや、怒ったという感情を遥かに超えて、人格が消えたというべきかもしれない。一瞬のことだった。

かぐやの目の前に、それはまるで瞬間移動のような速さで迫り、鼻面に膝蹴りを入れた。砂浜の砂が熊八に遅れて跳ね上がる。思わず後ずさりしたかぐやの視界から熊八は既に消えている。かぐやは背後に、ぐしゃりという音を感じた。それが自分の背中に槍が突き刺さった音であるということにはじめは気付かなかった。かぐやがその痛みに叫び声をあげている数秒の間に、熊八は太郎の右手から短剣を取り、姿勢を低くしたままかぐやの周囲を目にも止まらない速さで駆け抜けた。かぐやの体がずしんと砂に落ちる。四肢のすべてを切断されたのだ。もはや身動きが取れない。かぐやは熊八の覚醒に対応しきれないでいたのだ。

ただ、まだ勝算はある。劣勢の中、そうも考えていた。かぐやはじつと体内に邪気を溜め込み口から一気に放射しようとしていた。熊人はかぐやの目の前に立っていたが、さっきまでの殺気は無い。「俺のせいでこんなことになるなんて：太郎のおつとうとおつかあに：なんて言えばいいんだよ：」それを見て、かぐやはにやりと笑う。

「その必要はない：」かぐやが口を開くとその中には底が無いような闇が広がっていた。完全に勝利を確信していた熊人は虚を突かれ体勢を崩してしまふ。周りの音さえもその闇に吸い込まれたしまいそうだった。かぐやの口から見る見る暗黒の靄が吹き出し、それが熊人に向かって放たれようとしたときだった。

「おみっちゃんのお団子、すごく美味しかったよ」

突然、太郎の声があった。その瞬間、時が止まったようにその場が静止した。一瞬早く動いたのは熊人だった。

砂を蹴り、瞬時に距離を詰め、右手に握った短剣をかぐやの額に突き立て、碧い石をえぐり取る。開いていた口が、がくと閉じ目から力が失われる。

熊人は太郎を見る。

「結局、またお前に助けられたか：」熊人は冷たくなり始めている太郎に触れる。

「太郎：太郎：そうか、最後の最後までお前は：ありがとう：」熊人はかぐやの額からえぐり取った石を短剣の柄で叩き割った。石から黒い煙に似たものが噴き出て、すぐに白く風化した。御札を握った太郎の右手には、小指が立っていた。空が晴れた。

太郎の墓には三郎も一緒に埋葬され、葬儀には栗拾いをしていた小僧も列席していた。

「お兄ちゃんにお団子をもらったんだ」と泣きじゃくっている。

太郎の両親は肩を落としながらも、どこか覚悟が出来ていたというふうで毅然と振舞っていた。だがそれも村人の前ではそうであっただけで、実際のところは分からない。

一通りの葬儀が終わると、和尚が熊人とおみつに話しかけてきた。

「太郎さんは御札を使いなさったそうですね」

「ええ、小僧さんに頂いた御札がなければ、今頃この村はどうなっていたことか？」応えたのは次郎だった。次郎は四肢を失いながらも命を繋ぎ止め、熊人が作った義足で何とか歩ける程度にまで回復した。一時的にかぐやに体に乗っ取られていたために様々な人間の記憶が残ったままになった。かぐやの一件は熊人がうまく村人に説明したため、次郎を白い目で見ると人間はおらず、意外にも人の言葉を喋れることに嫌悪感を示す村人はいなかった。

「そうですね、ところで『偽』の札を使われた時、御札は何と喋りましたか？それが太郎さんの一番強い意志だったはずです」それを聞いておみつは泣き崩れた。熊人の頬にも熱いものが伝う。

それから一ヶ月が経った。

三人であるの丘に立つ。次郎は丘まで熊人に抱えてもらい、そっと下ろしてもらおう。

太郎と三郎の墓には毎日、花が添えられていた。それを誰が添えているのか村人には見当も付かなかったが、次郎は知っていた。太郎の墓に寄り添うように昼寝をしていると花を持った者が現れた。人ではない。あの時の蟹だった。次郎はそれを誰にも言わないでおこうと決めた。自分を「友だち」と言ってくれた太郎がそう望んでいる気がしたからだ。

「ねえ次郎ちゃん。太郎さん、本当に私のお団子食べてたの？」次郎は返答に困る。

「やっぱりねえ、何となくそんな気がしてたんだ：今頃天国で鼻をひくひくさせてるかもね」

熊八とおみつが笑うと、柔らかな風が三人を撫でていった。

いかかだったでしょうか。この物語はここでおしまいです。実はこの話をここまで詳しく人に話すのは初めてなのです。どうしてかって？それは僕にとってかけがえのない、特別な物語だからです。ああ、話すのに熱中しすぎて申し遅れてしまいましたね。

この物語の語り手は私、次郎でした…。



おしまい。

布団くんブログ

絶対に抜け出せない布団が、そこにはある。  
<http://futonkun.blogspot.jp/>